

から、輸入脚の長さを適当にとる事は、胃腸吻合を行うに当つて極めて重要なことであると考ええる。更に我々の第1例及び第2例が輸入脚の過長と共に癒着が閉塞の主要原因であつた事を思う時、術後の癒着或は索条の形成も原因の一つである事^{②③}は否定出来ない。

症状及び診断：輸入脚閉塞は高位腸閉塞の症状であり、発病は早い例では術後1日、遅い例では7年、10年、12年等の報告があるが、術後3～20日目に発生する事が最も多い。症状としては上腹部激痛、腹部膨満感を訴え、悪心、嘔吐を來たす。完全閉塞の場合には吐物に胆汁を含まないのが特徴であるが、僅かに胆汁が混入する程度の事が多い。上腹部は膨隆し、上腹部左側に腫瘍を触れる事が多く、蠕動不穩を認め、脈搏は頻数微弱となり、遂には輸入脚穿孔^{⑥⑦⑧}により汎発性腹膜炎を発生して死亡する事がある。

診断は上記症状により必ずしも困難ではないが、早期手術の必要があるからその可能性が考えられる場合には、假令確実な診断を下し得なくても速かに再手術を敢行すべきである。Perry^⑨は急性脾臓炎と誤診して手術の時期を失して、死亡した例を報告している。

治療：一般のイレウスに於ける治療法と同様に早期に手術を行うことが肝要であつて、癒着、索条のある場合は剝離、切除し、嵌頓のある場合には整復を行う。再嵌頓を防ぐためには間隙を狭め、又輸入脚閉塞に対しては Braun 氏吻合を行うことがある。Wells & Mac Phee^⑤は Billroth 氏第II法の吻合部を切除して Billroth 第I法に改変する方法を推奨している。何れの方法によるも大差はないが、要は開腹時の状況に応じて適切な手術法を撰択し、患者に与える侵襲を出来るだけ少くすべきである事は云うまでもない。我々の症例では第1例及び第2例に Braun 氏吻合を追加したが第2例は手術の時期が遅れたため遂に急性腹膜炎に

より死亡した。第3例は Braun 氏吻合部を含めて輸出入両脚を切除し、輸入脚を適当に短縮することにより治癒せしめ得た。

結 語

我々は Billroth 氏第II法による胃切除、結腸前胃腸吻合術後に輸入脚閉塞を惹起した3例を報告した。何れも輸入脚の過長が主原因であつた。更に輸入脚閉塞の発生原因に就て若干の考察を加え、胃切除術後の胃腸吻合には輸入脚を適当な長さにとる事が、術後の腸管通過障害を未然に防ぐ所以であることを述べた。

文 献

- ①永富：実地医家と臨床，10，11，1933。 ②大河原：実地医家と臨床，14，188，1937。 ③梶谷：日外会誌，40，800，1939。 ④清水：日大医誌，11，771，1952。 ⑤C. A. Wells & I. W. MacPhee：Lancet，ii，1189，1952。 ⑥木村：診療，6，512，1953。 ⑦J. P. West：Surg.，34，98，1953。 ⑧R. P. Warren：Ann. Surg.，139，202，1954。 ⑨T. Perry：Ann. Surg.，140，119，1954。 ⑩瀬尾：日外会誌，40，1617，1939。 ⑪A. Hofmann：Zbl. Chir.，12，691，1937。 ⑫W. Peterson：Arch. Klin. Chir.，62，94，1900。 ⑬本名：日外会誌，20，655，1919。 ⑭E. Koch：Zbl. Chir.，43，2504，1934。 ⑮F. F. McAllister：Ann. Surg.，128，1194，1948。 ⑯溝口，清水：日大医誌，11，771，1952。より引用 ⑰A. Hofmann：Zbl. Chir.，3，116，1925。 ⑱W. F. Quinn & J. H. Gifford：J. P. West：Surg.，34，98，1953。より引用 ⑲T. W. Mimpriss & St. J. M. C. Birt：R. P. Warren：Ann. Surg.，139，202，1954。より引用 ⑳中島：臨外，3，418，1948。 ㉑小坂：日外会誌，55，340，1954。 ㉒F. Smith：Lancet，i，421，1953。

長野県住民の耳垂附着状態について

昭和30年2月5日 受付

信州大学医学部第二解剖学教室（主任 鈴木教授）

栗 岩 純

On the Form of Ear Lobe of the Inhabitants in Nagano Prefecture.

Makoto KURIHWA

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Shinshu University.

(Director: Prof. M. Suzuki)

The author investigated the form of ear lobe of 827 inhabitants in Nagano prefecture. It was classified into three groups; type I (free), type II (moderate), type III (attached).

The results are summarized as follows:

- 1) The frequency of type I is high in both sexes under 10 years of age and decreases with advancing age, but on the contrary the frequency of type III increases with advancing age. The frequency of type II does not appear to increase in adults.
- 2) Type I in the males and type III in the females are found more frequently, while type II is found equally in both sexes.
- 3) In the range above 10 years of age, the form of ear lobe bears a close resemblance to the form of people in Kyoto prefecture, and is most different from the form of those in Tohoku district.

I

耳垂附着状態の人類学的意義の重要性については、他の顔面諸部の観察と共に、早くから提唱せられていたにもかかわらず、日本人に関しても現在なほ正確な統計が少い。かゝる原因の一つは、この種の分類が多分に主観的であるために、判定標準が定め難いことであつた。

日本人の耳垂附着状態に関する報告は、西、中山、内田、上田等の多くを見るが、これらを一律に比較するには上述の理由でおのづから無理が伴ふ。筆者は上田による標準が最も妥当と考えるので、それにならつて、長野県住民について得た成績を此處に発表しておきたい。

II

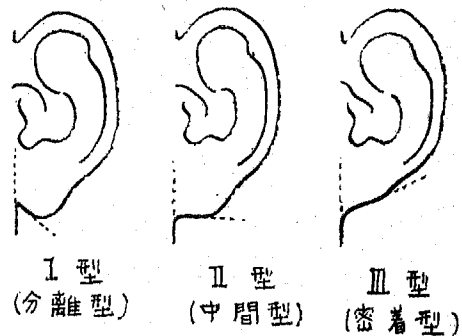
調査材料は827名、その性別、年齢分布は第1表の

第1表

	男	女
0 ~ 5	33	38
6 ~ 10	42	37
11 ~ 20	48	82
21 ~ 35	115	144
36 ~ 50	79	74
51 ~	65	70
計	382	445

如くである、なお、その詳細と調査地域は、北信地区の長野県下水内郡外様村字顔戸の73世帯、282名（男子178名、女子204名）と中信地区の東筑摩郡岡田村字岡田町53世帯、244名（男子104名、女子140名）及び県内にわたる、国立松本病院関係者201名（男子100名、女子101名）である。

分類の標準は上田^①にしたがい、次の三型とした。



I 型 (分離型):

耳垂が顔面皮膚に鈍角を以て附着するもの。

II 型 (中間型):

耳垂が顔面皮膚に略々直角に附着しているもの。

III 型 (密着型):

耳垂が鋭角を以て顔面皮膚に附着しているもの。
尚、耳垂を欠く所謂欠損型もこの中に含める。

III

第2表は、年齢的变化と性別による相違を考慮して、各型の分布を示したものである。

第2表 長野県住民耳垂の三型分布表 () 内は百分比

性別 年令	男 子				女 子			
	I (分離)	II (中間)	III (密着)	計	I (分離)	II (中間)	III (密着)	計
0 ~ 10	36 (48.00±5.77)	25 (33.33±5.44)	14 (18.67±4.50)	75	30 (40.00±5.66)	19 (25.33±5.02)	26 (34.67±5.50)	75
11 ~ 50	104 (42.97±3.18)	83 (34.30±3.04)	55 (22.73±2.69)	242	82 (27.33±2.57)	96 (32.00±2.69)	122 (40.67±2.84)	300
51 ~	21 (32.31±5.80)	19 (29.33±5.64)	25 (38.46±6.03)	65	21 (30.00±5.48)	21 (30.00±5.48)	28 (40.00±5.86)	70

第3表 長野県住民三型分布表 (10才以上)

性 別	男 子				女 子			
年 令 \ 型	I (分離)	II (中間)	III (密着)	計	I (分離)	II (中間)	III (密着)	計
10 才 以 上	125 (40.7%)	102 (33.2%)	80 (26.1%)	307 (100%)	103 (27.8%)	117 (31.6%)	150 (40.5%)	370 (99.9%)

第4表 他地方人との比較

地 方 \ 型	男 子			女 子		
	I (分離)	II (中間)	III (密着)	I (分離)	II (中間)	III (密着)
奈 良 県 山 辺 郡 (上田) n=726	129 (35.4)	106 (29.0)	130 (35.6)	108 (29.9)	77 (21.3)	176 (48.8)
京 都 府 (上田) n=202	40 (40.0)	30 (30.0)	30 (30.0)	28 (27.5)	36 (35.3)	38 (37.2)
新 潟 県 (上田) n=144	35 (46.7)	36 (40.0)	10 (13.3)	23 (33.3)	25 (36.2)	21 (30.4)
山 形 県 (上田) n=126	34 (56.7)	17 (28.3)	9 (15.0)	28 (42.4)	18 (27.3)	20 (30.3)
東 北 地 方 (中山) n=740	48 (11.3)	130 (29.9)	255 (58.8)	27 (8.9)	78 (25.5)	201 (65.6)
日 高 アイヌ (上田) n=212	75 (92.6)	6 (7.4)	—	115 (87.8)	14 (10.7)	2 (1.5)
長 野 県 (栗岩) n=678	125 (40.7)	102 (33.2)	80 (26.1)	103 (27.8)	117 (31.6)	150 (40.5)

年令的差異:

西^②が多数例について観察した結果、分離型は加令的に減少し、密着型は逆に増加する傾向を指摘し、黒田^③もこれを追試し、更に、上田^④は10才以下では、分離型が多く、密着型少く、10才以上では各型とも一定の比を保つと云う。

本成績では、各型とも年令階級による有意差は認められないが、10才以下では、I型(分離型)が、男女とも最も多く、年令の増加と共に減少する傾向を示し、III型(密着型)は逆に増大する様である。II型(中間型)は各年令階級を通じて殆んど変らない。即ち従来報告されている成績と同様な傾向を認める。

性的差異:

各型とも10才以上では、一定の比を保っているのので、資料の比較はすべて10才以上のものを用ひる。第3表は10才以上のものについての合計を示したものである。

それによれば、I型(分離型)は男子 40.7%, 女子 27.8%で明らかに男子に多い。III型(密着型)は男子

26.1%, 女子40.5%を示し、丁度逆に女子に多くなる。

II型(中間型)は男女間に差を認めない。

即ち、男子に於てI型(分離型)多く、女子ではIII型(密着型)が多くて、II型(中間型)は略々同じである。この結果は従来の報告と一致する。

地方的差異:

既に、西、中山、^⑤渡辺、^⑥大森等の報告があるが、分類規準が異なるので、直ちに比較が出来ないから、同一規準と思はれる、上田^④及び中山^⑦の成績と比較するに止めた。これを示したのが、第4表である。それによれば男女とも京都府住民に最も近い傾向を示し、次に奈良県住民に近く、東北地方住民、アイヌとは著しい懸隔を示す。

IV

長野県住民827名の耳垂附着状態をI型(分離型)、II型(中間型)、III型(密着型)の三型に分類して観察した結果、次の成績を得た。即ち、

1) I型(分離型)が男女とも、10才以下に多く、年令増加に伴つて減少し、III型(密着型)は逆に増加す

る傾向を示す。Ⅱ型（中間型）は各年齢階級とも殆んど変わらない。

2) 男子ではⅠ型（分離型）が多く、女子ではⅢ型（密着型）が多く、Ⅱ型（中間型）は男女とも変らない。

3) 10才以上のものについて、地方的比較をすれば、男女とも京都府住民に最も近似し、東北地方住民とは最も懸隔を示す。

文 献

①上田常吉、武内純四郎：都介野村住民顔面の観察、奈良県総合文化調査報告書（都介野地区）奈良県教育委員会：昭27。②西 才藏：九州人児童の耳垂形態、大日本耳鼻咽喉科会々報、39, 10, 昭8。③黒田

聖吉：現代人顔貌の研究（1）、人類学雑誌、51, 8, 昭11。④上田常吉：邦人及びアイヌの耳垂形態について、解剖学雑誌、27, 總會号、昭27。⑤中山種秋：五島々民に関する体質人類学的研究（顔面部諸形態の観察形態について）人類学雑誌、58, 3, 昭18。⑥渡辺嶺男、中村照彦、井上 隆：齋島住民の耳垂形状、科学、22, 7, 昭27。⑦中山英司：秋田、岩手、青森県人の毛髪、眼、鼻等の形態に関する人類学的研究、人類学雑誌、48, 12, 昭6。⑧山崎 清：顔の人類学、天佑書房、昭18。⑨金関丈夫、忽那将愛：生体学概論（一）、人類学、先史学講座2巻、昭13。⑩藤田恒太郎：生体観察、南山堂、昭25。

農山村の妊婦に就て

（殊に善光寺平を中心とした山間部と平坦部との比較）

昭和30年2月7日 受付

都立大塚病院産婦人科 元長野赤十字病院産婦人科

小 林 敏 政 白 石 水 内

Pregnant Women in Northern Nagano Prefecture

Tosimasa KOBAYASHI, Minochi SHIRAISHI

The authors examined 829 pregnant women in the agricultural and forest districts and reported the data obtained about the following items: age and season of marriage, difference of age between husband and wife, age of first birth, number of pregnant days, dental caries, serological examination for syphilis, number of abortion, blood pressure and gestational toxico-sis,

近時母性衛生の徹底が叫ばれて、都会地は勿論農村に迄ゆきわたりつゝあるが、農山村の母性の実態を知り之を基として対策が立てられるべきであると思ふ。余等は妊婦検診を善光寺平を中心とする各地で実施する機会を得てこの間の事情を調査する機会を得たのでまとめて報告する次第である。

本調査は昭和24年1月より昭和27年1月迄長野県下の殊に北信善光寺平を中心とした青木島、塩崎、共和、川中島、麻績、大田、浅川、日里、小田切、信濃尻、市川、秋津、鳥井の各村と篠ノ井町の15ヵ町村計35回の妊婦の集団検診時の調査で總計829名を善光寺平と称せられる青木島、大豆島、塩崎、共和、篠ノ井、川中島の所謂多少文化的平坦地と之を圍繞する農

山村の山間部とに區別し之を觀察した。

検診はすべてそれぞれの土地に出張検診しその土地の保健婦、助産婦、婦人会等の人々の協力の下に問診で調査したが記載不明のものは除外した。

結婚年齢は満年齢ですべきであつたが、満年齢が徹底しないため数え年を用いた。

第一表はそれである。

第1表

	30 以上	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17 以下
平 坦 部														
実数119	4		6	16	21	30	30	21	17	11	12	1		2
%	2.3		3.5	9.4	12.3	17.5	17.5	12.3	10	6.4	7	0.6		1.2
山 間 部														
実数390	28	7	13	29	35	71	53	46	30	32	29	13	3	1
%	7.2	1.8	3.3	7.4	9	18.2	13.6	11.8	9.5	8.2	7.4	3.3	0.8	0.3